The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「中年の危機」の社会的創出
Author(s)	大和, 礼子
Citation	年報人間科学. 1990, 11, p. 119-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5965
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部　〔一九九〇年三月〕
『年報人間科学』第十一号　一一九頁―一三七頁

「中年の危機」の社会的創出

大和礼子

「中年の危機」の社会的創出

はじめに

近代社会における、つまり私たちが自明のものとしている一生のイメージは、山形を描いている。頂点は中年期にあり、誕生から青年期まではそこへの上昇過程であり、老人期から死までは下降過程と考えられている。したがって中年期は安定や達成の時期としてイメージされている。

しかしながら現実には、中年期が安定的であるのか危機的であるのかは、時代によって、また社会によって異なっている。たとえばデュルケームが注目したように、ある社会層の自殺率はそれに属する人々の生き難さの反映である。かつての日本では青年や老人の自殺率が高く、その中間にある中年の自殺率は低かった。ところが近年のデータでは、中年の自殺率が最も高い。

また社会学や心理学といったアカデミックな領域における中年期の扱いも、時代によって社会によって差異が見られる。たとえば欧米諸国では早くから、中年期をプロブレマティックな時期と見る研究が積み上げられてきた。一方従来の日本では、人生途上のプロブレマティックな時期は青年期と老人期とされており、中年期が問題をはらんだ時期として考察の対象とされることはあまりなかった（女性の中年期が危機であるという認識はあったが、男性に関してはそのような認識はあまりなかった）。ところがごく近年になって、中年期が学問的研究の対象として注目されはじめている。

このように「中年の危機」を考察するためには、パーソナリティ特性やその発達段階といった心理学的視点に加えて、いかなる条件を備えた社会で「中年の危機」が起こりやすいのかという社会学的視点が必要となる。

そこで本稿では、まず第1章で「中年の危機」の先進国である欧米諸国の理論を検討し、「中年の危機」が起こりやすい社会の条件を探る。第2章では、分析の道具として時間の諸次元を定式化した後、日本において「中年の危機」が社会的に創出されるメカニズムを分析する。それと同時に、危機に直面した人々がとる乗り越え戦略についても分析する。最後に第3章では、本稿の分析視角を整理し、近年のライフサイクルあるいはライフコース研究の位置づけを行い、ライフコース・アプローチの展開のための視角を提示する。

第1章にはいる前に、本稿におけるいくつかの前提を確認しておきたい。分析の対象は男性とする。年齢は40歳から50歳を中心として前後に5歳くらいの幅を見込む。特に注釈なしに「中年（期）」という言葉を使う時はこの年齢層を指す。また本稿でいう「中年の

危機」とは、さしあたって、「中年になるまでの人生を社会的期待から大きくはずれることなく順調に歩んできた人が、中年になって予期しない精神的危機（一般的な言葉でいえばアイデンティティ・クライシス）を経験すること」としておく。

1　「中年の危機」論の検討

「中年の危機」の包括的な研究でもっともよく知られているものは、D．レヴィンソンをはじめとするエール大学グループの研究である。彼らの研究は、E．エリクソンの発達段階論とG．ユングの人生についての考えに影響を受けている。またエリクソンの発達段階論は、J．フロイトの精神・性的発達段階論をもとにしているが、エリクソン独自のものへと展開していくにあたってはユングの考えを大幅にとり入れている。さらにユング自身、はじめはフロイトの影響下にあったが、後に袂を分かち、フロイトとはかなり異なる理論をうちたてた。このようにレヴィンソンの研究に至るまでには、フロイト→ユング→エリクソン→レヴィンソンと続く流れが存在する。

そこでまず河合隼雄に従って(1)彼らの人生についての考え方の違いを明らかにし、「中年の危機」を引き起こす社会的条件を探る糸口にしよう。

1・1　人生についての二つの考え方

フロイトはヒステリー患者の分析から、人間は心理・性的な体験を段階的にすることによって成長していくものであり、そのいずれかの段階において障害があるときは、青年期、成人期になって神経症が発症する原因になると考えた。そしてその段階と人間の生理的な欲求や活動を結びつけて表1の右端のような発達段階論をつくっ

（表１）

発達段階	精神・社会的危機	重要な関係の範囲	精神・社会的モダリティ	基本的徳目（活力）	精神・性的段階
Ⅰ 乳児期	信頼対不信	母親的人物	得る－返す	希望	口唇的 感覚的 （取り入れ）
Ⅱ 早期児童期	自律性対恥・疑惑	親	保持－放出	意志	肛門－尿道的 筋肉的 （把持－排泄的）
Ⅲ 遊戯期	積極性対罪悪感	基本的家族	まねる（＝追いかける）。～のように作る（＝遊ぶ）	目的	幼児性器期 移動期 （侵入，包含的）
Ⅳ 学童期	勤勉性対劣等感	近隣・学校	物を作る（完成する）。物をまとめる	適格	潜在期
Ⅴ 青春期	アンデンティティ対同一性拡散	仲間集団・外集団，リーダーシップのモデル	自分であること。それぞれ個体であることの共有	忠誠	破瓜期
Ⅵ 若い成人期	親密と連帯対孤立	友情，性，競争，協力などの相手	自分を他人の中に失い，発見する	愛	性器性
Ⅶ 成人期	生殖性対停滞	分業や家事の相手	存在を作り，世話をする	世話	
Ⅷ 成熟期	統合性対絶望	「人類」「わが種族」	あるがままに存在する。非在に直面する	英知	

出所）細木照敏「Ⅵ青年期心性と自我同一生」『岩波講座：精神の科学６：ライフサイクル』1983、岩波書店

た。この段階論によると、発達は「性器性」の獲得で終わることになる。

「名誉、権力、名声、そして女性の愛」を分析の目標としてあげたことからもわかるように、フロイトにとって人生の最終目標は「より強くなり、より高く昇ること」、つまり社会的に成功し、家庭では長として敬愛されような壮年男性イメージの実現であった。

それに対してユングは、社会的に高い地位に到達し「名誉、権力、名声、女性の愛」を手にいれた男性が、中年になって自分の人生の無意味さ、無目的に苦しめられているという臨床経験を持っていた。ユングはこのような心的な変化を太陽の南中点からの下降になぞらえ(2)、変化の生じる原因を次のように考えた。人が社会的地位や名声などを築きあげるということは、自分の自我を社会的に受け入れられるようなある程度一面的なものに限定し、受け入れ難いことを排除した結果生じたことである。ところが35～40歳くらい（ユングは中年期のはじまりをこの頃と考えていた）になると自分が排除してきた半面に気づき、今までの一面的な人生が無意味なものに思われてくる。そして排除してきたものを取り入れようとするのだが、今まで排除してきたものは、それだけの理由があるから排除してきたのであり、それを取り入れようとしても社会も自然も評価するはずがない。そこでその人は困難に陥り「中年の危機」を経験するのである。つまりユングは、人生には前半と後半が存在し、フロイトが最終目標と考えた壮年男性イメージの追求は前半の過程に過ぎず、後半には前半とは別のイメージを手探りしつつ生きなければならないと考えたのである。

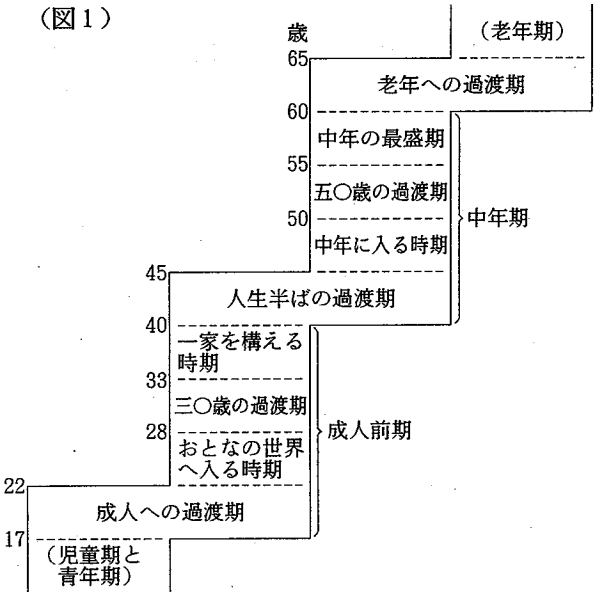
次にエリクソンは、フロイトの段階論に母子関係や友人関係など対象関係の視点を導入し、さらに「成人期」「成熟期」という最後の二段階をつけ加えて、表1の左側のような発達段階論をつくりあげた。彼は壮年期（表1の「若い成人期」）以降の人生に注目し、壮年期から次の段階に移行する時に「生殖性対停滞」という発達課題をおいた。「生殖性」とは単に自分の子を生み育てることではなく、もっと広く、後に続く世代のために自分は第一線を退き、彼らの成長のために力を貸すことを意味する(3)。そしてこの課題を達成しない限り人は人生の停滞感に悩むと考えた。

最後にレヴィンソンらの考えを見てみよう。エリクソンの発達段階論がどちらかといえば青年期に重点を置いているのに対して、レヴィンソンらは成人期に注目した発達段階論をつくりあげたといえよう。彼らは人生の全体を次のような①～④の四期に分け、特に②成人前期と③中年期（成人中期）について図1のような発達段階を見いだした。

①児童期と青年期　0－22歳
②成人前期　17－45歳
③中年期（成人中期）　40－65歳
④老年期（成人後期）　60歳以降

「人生半ばの過渡期」（図1）には、成人前期につくりあげた職

（図1）



出所） D. レヴィンソン（南博訳）『人生の四季：中年をいかに生きるか』1980、講談社

業、家族、余暇、それらにまつわる人間関係、その他生活のすべての要素（レヴィンソンらは「生活構造」と呼んでいる）について「このままではやっていけない」と感じ、それまでの人生に問い返しを行い、「生活構造」の修正を行う。この修正がうまく行われたなら、人生は再び生き生きとしたものになり満足感も高まるというのである(4)。

以上のように、フロイト、ユング、エリクソン、レヴィンソンらの心理学的な発達段階論を検討すると、人生についての考え方とその前提となる価値観には二つのタイプがあることに気づく。第一のタイプはフロイトに見られるもので、人生とは壮年男性イメージを最終目標としてその実現に向かう過程であると考える。この考え方によると、「より強くなり、より高く昇ること」が価値である。

第二のタイプはユングにはじまりエリクソン、レヴィンソンらに受け継がれたもので、壮年男性イメージの追求は人生半ばまでのことに過ぎず、それ以降にも別のイメージを追求する人生があるとする。この考え方は壮年期以降の人生により高次の価値を認め、「より強く、より高く」という価値観の転換を含んでいる。これら二つのうち「中年の危機」を理論化しえたのは、いうまでもなく後者である。

1・2 「中年の危機」の社会的条件

それでは後者の理論が前提とした社会、つまり「中年の危機」が起こりやすい社会とはいかなる社会であろうか。それは次のような条件を備えた社会である。第一に、理念的には、壮年男性を理想的人間像とし、望ましい人生とは壮年男性イメージの実現と維持の過程であると考える。支配的な価値観は「より強く、より高く」である。第二に、現実には、大部分の人が中年期以降は壮年男性イメージからはずれた人生を歩むことを余儀なくされる、そのような社会構造が存在する。したがって、近年日本で「中年の危機」が注目されはじめたのは、日本社会にこれらの条件が備わってきたからであると考えられる。

ところでG.H.エルダーによれば、人生の歩み、つまりライフコースとは、年齢別に分化した役割と出来事を経て個人が辿る道(5)である。そして役割と出来事の年齢別分化を規定するのは、生物学的な時間であるよりは社会的に構成された時間である。そこで第2章では、まずはじめに時間の諸次元の区別をし、次にそれを用いて日本における「中年の危機」の分析を行うことにしよう。

2　「中年の危機」の社会的創出

2・1　時間の諸次元

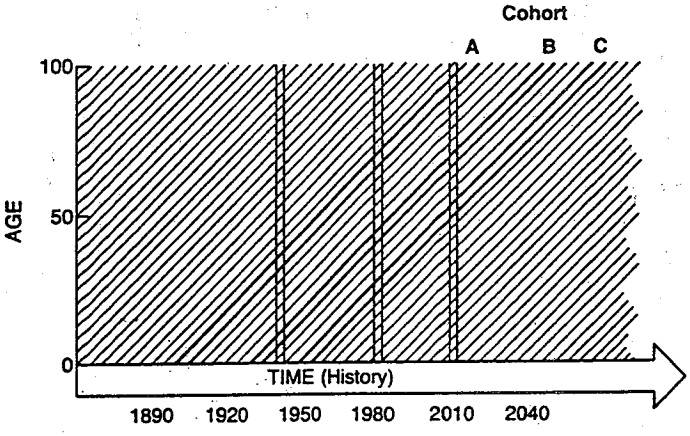
ライフコースの分析においては、時間をいくつかの次元に区別する必要がある。そこで以下では図2に従って各次元の時間について説明しよう。図2の縦軸は「生物学的時間（生物学的年齢）を示している。横軸は「歴史的時間」を示しており、経済的、政治的、社会的、文化的な変化を表す。

歴史的時間のある一点から垂直にひかれた線が、その歴史的時間における「社会的時間」を示している。社会的時間とは、ライフコースにおける各種の役割や社会関係の移行の時期を示すものであり、通常は生物学的年齢を指標にしている。社会的時間は、分析上、「事実上の社会的時間」と「規範的な社会的時間」に区別できる。

事実上の社会的時間とは、役割や社会関係が移行する時期の、平均的あるいは最頻的なパターンである。これは社会条件や社会変動がある生物学的年齢の人々に作用した結果生じ、当該社会の機会構造を反映している(6)。たとえば急激なOA化によって中高年の人ができる仕事が減ったために、この年齢層の解雇や配置転換が増えた場合などに観察される。事実上の社会的時間を「ライフコース・パターン」と呼ぶことにする。ライフコース・パターンは社会によってまた時代によって異なっている。

次に、規範的な社会的時間とは、「何歳頃には就職し、何歳頃には役職に就くべきである」というような、役割や社会関係の移行の

（図２）



出所）Riley, M. W., Foner, A. and Waring, J. ; Sociology of Age ; Smelser, N. J. edt. “Handbook of Sociology” 1988, SAGE PUBLICATIONS.

時期についての社会的に共有された信念である。いわば当該社会において標準的とされる人生の時間割であり、意味の領域に属するものである。D・プラースはこれを「道筋」と呼んだが、本稿ではR・A・ルヴァインの用語に従って「ライフプラン」と呼ぶことにする(7)。ライフプランは社会的に共有された年齢役割（以下「年齢役割」という時は社会的に共有されたものを指す）の連続体と見ることもできる。ライフプラン（または年齢役割）も社会によってまた時代によって異なっている。

ライフプランは次のような特徴を持っている。第一にライフプランは社会的価値と結びついている。ライフプランどおりの人生を歩むことが社会的価値を実現していると見なされる。第二にライフプランは自己意識、特に年齢に関する自己意識と結びついている。人が自分は何歳なのだと実感したり自分の役割を意識したりするのは、生物学的年齢ではなく、年齢役割に反応した結果である(8)。第三にライフプランは人々の自己評価を左右する。ライフプランどおりの人生を歩んでいれば社会的価値を実現していることになり、肯定的な自己評価を持つことができる。逆にライフプランから逸脱していると社会的価値からも逸脱していることになり、肯定的自己評価を維持することは難しくなる。第四に、家族や同僚といった重要な他者との相互作用を通じて、人々はライフプランについての知識を内面化していく。内面化が充分に行われているならば自発的にライフプランを実現しようとする。内面化が不十分であったりその他の障害のためにライフプランから逸脱している場合は、重要な他者が逸脱しないようにと当人に対してはたらきかける。このようにライフプランは、人々の人生をその時代と社会において標準的とされるパターンにあわせていくはたらきをする。

ライフコース・パターンとライフプランは同じ社会の同じ歴史的時間にあっても必ずしも一致していない。特に変動の激しい社会では両者の間にずれが存在する。そこでそのずれの生じるメカニズムを見てみよう。

M・W・ライリーは年齢規範の形成について次のように定式化している(9)。

①社会変動の影響によって、あるコーホートがある年齢において、以前とは異なった行動のパターンを発達させる。

②それらがその年齢にふさわしい規範や規則として新しく定義され、権威により強化され、他の年齢層にも承認される。

③後続のコーホートの年齢に関する行動を指示する。

本稿の議論に即して言い換えると、①はライフコース・パターンの変化、②はライフプランの誕生、③はライフプランの定着である。ふつう経験的には、①から③に至るには時間を要するので、ライフプランとライフコース・パターンは一致しないのである。

最後に、図2の斜めの線は「個人的時間」つまり加齢体験を示す。もしコーホート（同年出生集団）に注目するならば、同一コーホートに属する人々の加齢体験を示す。

このように人々は生物学的時間、歴史的時間、ライフコース・パターン、ライフプランといったさまざまな次元の時間の影響を受け

ながら齢を加えていくのである。人間の加齢というものは単に生物学的なものではなく本質的に社会的、歴史的なものなのである。

2・2　歴史的時間の移行によるライフコース・パターンの変化

近代社会における成人男性の主な生活領域は職場と家庭であり、重要な他者は同僚（上司や部下を含む）や妻子である。そこで、歴史的時間の移行に伴いライフコース・パターンがいかに変化したのかを、これら重要な他者との関係を通じて見ていくことにしよう。説明を図式化しわかりやすくするために、単純化に陥る危険を承知の上で、歴史的時間の移行を次の三つの時期に区分にしたい。

第Ⅰ期　第二次世界大戦以前

第Ⅱ期　戦後から高度成長期を経てオイルショックまで

第Ⅲ期　オイルショック以後現在まで

まずはじめに職場における変化を見てみよう。第Ⅰ期では、大部分の人々が生涯農業などの家業に従事し、しかも男性年長者を特別に優遇する「家」制度が存在していた。そのため加齢につれて男性の地位は上昇、安定していったと考えられる。第Ⅱ期には、男性は被雇用者となる割合が高まり、同時に「家」制度も衰退していった。しかし一方でこの時期に、企業において男子正規従業員に対する長期安定雇用慣行が広くゆきわたった(10)。このために定年による強制退職までは、安定した雇用と年功による昇進が保障される可能性が高まった。

ところが第Ⅲ期のはじめのオイル・ショックの頃から、長期安定雇用慣行が崩れはじめた。従業員の年齢構成とポストのアンバランスや、企業活動の質が目標達成型から情報創造型のものに変わってきたため、中高年従業員や、一つの組織に長くいて外部情報に疎い人材は重視されなくなったのである(11)。この結果従業員にとっては、年功を積んだにもかかわらずポストにつけず、定年前に出向や早期退職勧奨を受ける可能性が高まった(12)。

次に親子関係について見てみよう。父親が40～50歳ならば、その子は思春期または青年期にあたる。保護される存在から当該社会の一人前の存在へと社会的位置づけが変わる時期である。このような社会的位置づけの転換は当人にとっては過酷な経験であるし、当該の社会にとっては新しいメンバーの補充という重大事であるから、人類の各社会はその社会に応じたやり方でこの転換をスムーズに行う方法を発達させてきた。通過儀礼とかイニシエーションとか呼ばれるものである。これらは通常、社会のエージェントが当人に一人前の承認を与え、社会の他のメンバーにも説得的に示すことによって行われる。日本社会にももちろん存在するのであるが、歴史的時間の流れはイニシエーションのエージェントと基準について変化を引き起こした。

第Ⅰ期は村落共同体がまだまだ生命力を持っていた時期である。そこでは、ムラの制度としてイニシエーションの儀式が行われたり、若者組などが存在したので、若者たちはこれらをつうじて一人前の承認を得た。ここには親の直接的な関与はなかった(13)。

戦後から高度成長の終わりまでの時間は村落共同体の解体過程で

あり、イニシエーションの制度的担い手がなくなっていく過程であった。しかしながら地縁関係や親族関係は細々と生き残っていたので、若者たちが近隣や親族の年長者と情緒的に深い関係を持つことは可能だった。第Ⅱ期のイニシエーションは、これら親以外の大人たちから一人前の承認を得ることによって、個人的に行われた。ただし若者当人にとって、個人的なイニシエーションは第Ⅰ期の制度的なものよりずっと困難だった。

このように第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じてイニシエーションに直接親の関与はなく、したがって第Ⅲ期で見られるような、思春期の子に親が優位性を否定される契機は存在しなかった。

高度成長が終わり第Ⅲ期になると、地縁関係や親族関係の希薄化はさらに進み、若者が情緒的な関係を持つ大人として制度的に認められているのは、親と教師だけになってしまった。その結果イニシエーションもこれらの大人が担わざるを得なくなったのである。

それに加えて、インシエーションにおける一人前の基準にも変化が見られた村落共同体での基準は、ある仕事ができるか否かといった二分法的で易しいものであったため、ほぼ全員が一人前の承認を得ることができた。ところが第Ⅱ期、第Ⅲ期には、学校の成績や進学などの序列的なものが制度的基準になってきたため、若者たち全員に一様の承認を与えることが難しくなった。

このようにエージェントと基準が変化したことにより、成績の良いものは親や教師から容易に承認を得ることができるが、そうでないものは、別の方法によって承認を得なければならないという状況が出現した。別の方法とは、成績や進学とは無関係に、親や教師から対等の人間と認められることである。これを親や教師の側から見るならば自らの優位性を否定することである。今日の制度では教師がこのような個別的全人格的承認を与えることは難しいので、通常は親がこの役割を担う。ところが親が自らの優位性をあくまでも保持して、子を対等の存在、つまり自分の命令にはもはや服さず、時には対立さえする独立の存在と認めることを拒否したならば、子は親の優位性を否定することによってしか一人前の承認を得ることはできない。近代小説の大きなテーマだった親との確執の問題も、その深い意味はイニシエーションの完了という人類の若者に共通するものだったといえよう。

最後に夫婦関係について見てみよう。人口の大部分が農業などの家業に従事していた第Ⅰ期には、家族は一個の経営体であり、通常は男性のリーダーに率いられていた。そのため建前としての夫優位は生涯変わらなかった。また妻は、子を生み育てること以上に、経営体の一労働力として生涯にわたり多くのことを期待されていた。

第Ⅱ期には、家族は第Ⅰ期で見られたような経営体としての性格を失っていった。夫は外で働き、妻の多くは家庭で夫を支えるものとして専業主婦になった。夫婦は平等であるという建前はあっても、実質的には稼ぎ手である夫が優位であった。子どもの手が離れるようになった専業主婦が存在意義を失って精神的危機を経験することはあった。しかし「男は外、女は内」という役割分業規範が強かったため、家庭領域における妻のアイデンティティ危機を夫婦の問題

としてとらえる契機は存在しなかった。

このように第Ⅰ期、第Ⅱ期をつうじて、夫の妻に対する優位という事態は変わらなかった。

ところが第Ⅲ期になると、職場、地域など妻が家庭外でコミットメントできる領域が増えたために、外と内という役割分業規範はあいまい化し、また夫に経済的文化的に従属する必然性もなくなった。したがって妻が家庭で不満を抱いたならば、夫婦の問題として夫に改善の交渉をし、非常手段として夫から独立することもできるようになったのである。

以上のことを男性のライフコース・パターンという視点からまとめると、次のようになろう。第Ⅰ期、第Ⅱ期には、ライフコース・パターンは「壮年男性イメージ」の実現に向けて上昇一途、または上方安定のラインを描く。第Ⅱ期においては職業で定年という下降パターンが存在するが、少なくとも定年以前は上方安定パターンであった。またたとえ子や妻による優位性の否定があったとしても、家庭領域は夫の領域ではなかったので、職業領域で成功しているならば、妻子の反抗は文字どおり反抗として正当性のあるものとは認知されなかった。したがって、ライフコース・パターンの下降をもたらしはしなかった。ところが第Ⅲ期になると、職業における昇進の停止や早期退職勧奨、家庭における父あるいは夫としての優位性の否定などが中年期に起こる。そのためそれまで上昇していたライフコース・パターンは中年期を境に下降に転じることになる。

今日の40～50歳の人が生まれたのは第Ⅰ期の終わりから第Ⅱ期のはじめである。彼らはこのような歴史的時間の流れとライフコース・パターンの変化の中で、年齢を重ねてきたのである。

2・3　構造的ジレンマとしての「中年の危機」

私たちの加齢体験は歴史的時間やライフコース・パターンに加えて、規範的な人生の時間割であるライフプランの影響も受けている。そこで現在40～50歳の人のライフプラン体験を見ることによって、「中年の危機」がなぜこのコーホートに集中的に起こったのかを見ることにしよう。

まず、ライフプランが私たちの人生に影響を及ぼす仕方をもう一度確認しておこう。私たちは「この世に生をうけて間もない頃からその世代と地域において標準的なものとされている成長の時間割を注入され教えこまれる(14)」。この時間割は「人びとが文化的価値（本稿の社会的価値と同じ…引用者注）をみずから実現していくためのライフコースの方向指示を意味する(15)」ので、人々はこの標準時間に自分の人生をあわせようとする。そしてそれに成功することによって肯定的な自己評価を持つことができる。

ところで本章のはじめで見たように、戦後から今日までのような変動の大きな社会ではライフプランとライフコース・パターンの間にタイム・ラグが存在する。現在40～50歳の人々が内面化してきたライフプランは、今日（第Ⅲ期）のライフコース・パターンにそったリアルタイムのものではなく、彼らの親世代のライフコース・パターン（第Ⅰ期、第Ⅱ期）にそったものである。後者のライフプラ

ンによるならば、40〜50歳とは、職場では指導的な地位につき、家庭でも優位者であるはずの年齢である。ところが彼らが現実に経験するのは、職場でも家庭でも優位性を保つことができなくなるというライフコース・パターンである。これは彼らが内面化しているライフプランからの逸脱である。

ライフプランは社会的価値と強く結びついている。したがって人生の各段階でライフプランを実現していくことは、社会的価値——近代の社会的価値の男性向けの側面は「生産」「成長」「強さ」などである——を実現していく過程とみなされる。彼らのライフプランからすると、40〜50歳はこのような社会的価値の達成と安定の時期であるはずであった。ところが現実にライフプランから逸脱するということは、思わぬ早い時期に社会的価値からも逸脱するということを意味する。

また、ライフプランは社会的価値実現の道であるから、人々はライフプランにそった人生を生きる時、最も容易に自己充足感を抱くことができる。したがって、ライフプランからの逸脱は肯定的自己評価の維持をも難しくする。

つまり、急激な社会変動の結果、ライフプランとライフコース・パターンが一致しなくなった。そのために、中年の人々が社会的価値実現の道筋であるライフプランに従おうとすると、職場の人事に抵触したり子や妻の自立を妨げたりして、重要な他者との間に争いを引き起こすことになる。一方ライフコース・パターンのままにまかせると、社会的価値から逸脱し、肯定的自己評価も維持できない。このようなジレンマが社会的に布置されていること、これが「中年の危機」の社会的創出メカニズムである。

2・4　危機の乗り越え戦略

このようなライフコースの危機に対しても多くの人が高い適応性を示すことはさまざまな調査において確かめられている。そこでこの節では、「中年の危機」に遭遇した人がそれを乗り越えるためにとる戦略を見ていくことにする。

前節の分析から明らかなように、危機はジレンマの解決によって乗り越えることができる。そのためには、重要な他者との関係を調和させることと社会的価値からの逸脱をくい止めることという、相反する課題を同時に達成しなければならない。そこでプラースによる「レトリック活動——重要な他者との間で繰り広げられる確認と説得の動的過程——」の定式化を用いて、人々がこの困難な課題に挑戦していく過程を分析していこう。

プラースによるとレトリック活動は、「確認」「正当化」「予測」の三つの過程から成る。人々は当該社会のライフプランにそって人生を歩んでいかなければならないと感じるので、ライフプランに照らして、自分のライフコースの進みぐあいが適当なのか早すぎたり遅すぎたりするのかを「確認」する必要がある。確認は当人が単独で行うのではなく、重要な他者と共に行わねばならない。両者の意見がくい違って「自分が適切な時間割に従っているということを当人が主張して他の人たちに認めさせようとすることもあれば、逆に

他の人たちが当人を適切な時間割に従わせようとすることもある」。しかしとにかく彼らの間で意見を調整して、当人のライフコースの進みぐあいについて一定の合意に到達しなければならない。この合意形成の過程で彼らは「確認」を「正当化」、つまり「その確認事項に対して文化的に妥当な根拠を与える」必要がある。こうして、「確認」と「正当化」が行われると、彼らはそれを「未来に投射し」、お互いの今後の人生を「予測」するための基礎として用いることになる(16)。

この定式化をジレンマの解決に適用すると、「確認」によって重要な他者との関係を調整し、「正当化」によって社会的価値とのつながりをつけ、「予測」によって当人と重要な他者とは共同して人生の次の局面に進んでいく準備ができる。つまりレトリック活動を十全に行うことによって危機は乗り越えられるのである。

ところで、ジレンマ状態はすべてのケースに共通の初期値であるが、次に続く「確認」の内容と重要な他者に誰を選ぶかによって、危機の乗り越え戦略にバリエーションが生じる。そこで以下では図3に従ってそのバリエーションを見ていこう(本稿では「予測」のバリエーションについては考察しないので、図3では省略した)。

まず「確認」は、当人がライフプランどおり職場や家庭で優位者なのか否かをめぐって行われる。当人が、今までと同じ重要な他者に対して、「優位者である」とライフプランの維持を主張した場合、合意は達成されず、ジレンマは解決されない(戦略A－1)。当人があくまでライフプランを維持したいならば、重要な他者のメンバーチェンジを行い従属的な人々を新たに採用するという戦略をとることができる。この戦略では、当人は「優位者である」という合意を得ることができ、重要な他者との関係の調和と社会的価値の実現を同時に達成できる(戦略A－2)。地位が下がらないような転職、結婚のやり直しなどがこれにあたる。

メンバーチェンジを行わず、当人が重要な他者の主張に歩み寄って「優位者であり続けることはできない」つまりライフプランから逸脱したという合意を得る戦略をとることもできる。しかしこの「確認」だけなら社会的価値から逸脱したままでなので、危機は乗り越えられていない。そこで当人と重要な他者は「確認」を「正当化」しなければならない。「正当化」は社会的価値の再解釈を通じて行われる。通常の社会的価値の解釈を変えることにより、重要な他者たちと合意した自分の状況は社会的価値からの逸脱ではない、と正当化するのである(戦略B)。

たとえばある父親は、自分が好きで始めた仕事をやり抜き、家業として成功させた。彼は子が家業を継いでくれることを望んだが、

(図3)

レトリック活動／戦略	確認			正当化
	内容	重要な他者	合意	
A－1	ライフプランの維持	今までと同じ	無	－
A－2		新しく採用	有	不要
B	ライフプランからの逸脱	今までと同じ	有	社会的価値の再解釈

子は反発して自分の好きな別の道に進んでいった(17)。

この時彼らは、「父は子に職業を命じることはできない、したがって通常の意味での父の優位性からは逸脱した」という「確認」をしている。しかし同時に、「強さ」という社会的価値を「子に命令する」という通常の意味から「好きなことをやり抜く」という独自の意味へと解釈し直し、父は依然として「強さ」という社会的価値を実現していると「正当化」もしているのである。

このような「確認」と「正当化」によってジレンマは解決され、当人と重要な他者はお互いの未来を「予測」し、相互の関係を保ったまま人生の歩みを進めることができる。

ところで、ここで危機は完全に消滅し、レトリック活動は終るのであろうか。実はそうではない。戦略Bによって得られた社会的価値の新しい解釈は、社会一般に承認されたものではなく、重要な他者との間でのみ承認されたものである。通常の社会的価値が最頻的で一般的なものであるのに対して、再解釈された価値はより具体的で個別的なものである。通常の社会的価値が通用する社会一般をマクロ・コスモスとするならば、重要な他者との合意で成り立つ意味の世界はその中に浮かぶミクロ・コスモスである。ミクロ・コスモスの中では、社会的価値の独自な解釈とそれにもとづく肯定的な自己評価を維持することができる。しかし、ミクロ・コスモスはマクロ・コスモスの中にあり、マクロ・コスモスからの一般的な価値の侵入にさらされているので、肯定的な自己評価を脅かされる可能性は常に存在する。

それでは人々はいかにしてミクロ・コスモスを維持するのであろうか。ミクロ・コスモスの維持とは、P.バーガーとT.ルックマンの用語で言うと、主観的現実の変化とその維持である。彼らはこれを「翻身」と呼んでいる。バーガーとルックマンによると「翻身」すること自体はさほど難しいことではないが、「翻身」を維持することは難しい。そのためには「社会的条件」と「概念的条件」の二つが兼ね備わっていなければならない。

社会的条件の中で重要なのは、①個人を他の主観的現実を持つ人々から隔離すること、②意味ある会話における対話の相手の選択を慎重に行うことの二つである(18)。ところが普通の社会生活を営んでいる人々は社会から隔離されているわけではないし、重要な他者とだけ会話をしているわけでもない。したがって、社会的条件は無いに等しい。

そこで概念的条件として、「翻身」に関連することすべてを正当化する装置が必要となる。本稿の議論に即して言うと、正当化とは、重要な他者との合意が通常の社会的価値から逸脱したものではないことを外部に対して説得することである。プラースは重要な他者との間の説得活動に注目したが、当人と重要な他者は共同して、マクロ・コスモスの住人つまり社会一般に対しても説得活動を続けていかなければならないのである。説得のための切札として社会的価値の新しい解釈は繰り返し提示され、正当化装置として使われるであろう。「本当の強さとは高圧的に命令に服従させることではありません。自分の好きな道を最後までやり抜くこと、これが本当の強さ

なのですよ」と。

この過程を通じて人々は、ライフプランと自分の現状との乖離や、通常の社会的価値と自分が再解釈した価値との乖離を常に意識せざるを得ない。しかし一方ではこの緊張関係によって、類型的ではない自分の人生を生きているのだという実感を持つことができる。このかけがえのない人生の意味を支えてくれるのは、いうまでもなく重要な他者である。

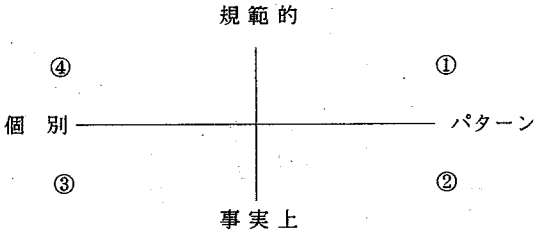
3　ライフコース論の視点と課題

この章では第2章で用いた分析視角がライフコースの研究に対してどのような意義を持ちうるのかを述べたい。

3・1　四つの分析視角

第2章の考察から、ライフコースを見る視点について二つの軸を設定することができる。第一の軸は、危機の社会的創出と乗り越え戦略の分析に見られるように、個人の人生にはパターン化の圧力がはたらくが、パターン化に抗して個別化に向かう側面もあるという考え方に由来する。すなわちライフコースを最終的にはパターンと見るのか個別的なものと見るのかという「パターン－個別」の軸である。第二の軸は、社会的時間をライフコース・パターンとライフプランに分けた考え方に由来する。すなわちライフコースに影響を与えるものとして規範的なものを重視するのか、規範化されていない事実上の社会的機会構造を重視するのかという「規範的－事実上」の軸である。二つの軸は独立なものと考えられるので、両者をクロスさせることにより図4の四つの視点を分節化することができる。

（図4）



①は規範的なものによって最終的にパターン化されるという見方であり、ライフプランの視点である。②は事実上の機会構造によって最終的にパターン化されるという視点であり、ライフコース・パターンの視点である。③は事実上の機会構造に影響さるが完全にパターン化されることはなく最終的には個別的であるという視点であり、危機乗り越え戦略のA－1、A－2などに見られる。④は規範的なものに影響されるが最終的には多様であるという視点であり、危機乗り越え戦略のBに見られる。

この四つの視点によって、既存のライフサイクル・アプローチやライフコース・アプローチを整理しておきたい。

日本においては、戦後ライフサイクル・アプローチが盛んに行われてきた。このアプローチは、集団としての家族を研究対象として取り上げ、家族の発達段階を設定する方法をとって、多くの成果を

あげてきた。しかしながら近年、家族自体が変わってきたこともあって、研究者がこの方法に対する行きづまりを感じるようになり、そのブレイク・スルーが模索されている。

ライフサイクル・アプローチの限界として森岡清美は次の3点をあげている(19)。

①家族の発達段階を設定して考察することが多く、しかもその段階を平均値や中央値によって設定したり、あるいは標準的とされる発達を前提にして設定する。そのため「正規」のコースから外れた家族を除いて考察した。

②家族の集団的統一性を自明の前提にしている。そのため、構成員個々の人生に注目する視点は希薄である。

③加齢による比較的恒常的な発達パターンに注目しがちである。そのため、戦争や経済不況などの歴史的イムパクトは無視してきた。

これらはライフサイクル・アプローチの限界ではあるがまた特徴でもある。①の＜平均性＞＜標準性＞が基本的な特徴であり、②③は派生と考えられる。②については、ライフサイクル・アプローチは家族の＜平均的＞＜標準的＞な発達段階を設定したため、個人に注目する場合でも、各発達段階にふさわしい役割（子・夫・父・祖父など）を演じ分けながら加齢していく役割人間と見なした。そのため、個人の個別性への関心は希薄にならざるを得なかった。また③については、＜平均的＞＜標準的＞な発達段階を設定するためには、歴史的イムパクトはノイズとして扱わざるをえなかった。

したがって近年ブレーク・スルーとして提案されているさまざまな方法も、前提視された＜平均性＞＜標準性＞を問い直す試みとして位置づけることができる。第一の方法は＜平均性＞＜標準性＞をできるだけ低く見積ろうとするものである。人生は多様であるという視点をとり、ある人の生活史をできるだけ個別的なものとして記述しようとする。これは図4の④および③に置くことができる。

第二の方法は＜平均性＞に注目し、人々の人生には事実上の＜平均性＞が観察されることを認めはするが、その＜平均性＞は社会の機会構造や歴史的事件によってパターン化された結果であると考える。＜平均性＞を自明のものとして根拠を問わなかったライフサイクル・アプローチを批判的に乗り越えようとするものであり、エルダーによる大恐慌の影響のコーホート差を明らかにしようとするアプローチ(20)はその代表例である。

第三の方法は＜標準性＞に注目し、人々の人生に＜標準性＞が観察されるのは人生の歩み方についての社会規範が存在し、人々が自分の人生をそれに合わせようとするからだと考える。ライフサイクル・アプローチは発達段階や発達課題の設定にあたってこのような社会規範の存在には無反省的であった。それに対して第三の方法は規範の存在に反省的に光を当て、規範のはたらきを記述するばかりでなく、規範は社会的に構成されたものであることをも明らかにしようとした。ルヴァインの「ライフプラン」の研究などがその例であり、これは図4の①に位置づけることができる。

3・2　ライフコースの局面と四つの分析視角の統合

以上見てきたアプローチはいずれも、一つの視点を一貫して重視してライフコースのはじめから終わりまでを分析しようとするものである。それに対して本稿で試みたのは、ライフコースの局面によって強調する視点を変えるという方法である。この方法の萌芽はプラースの「成熟のレトリック」の中に見られる。プラースは、個人の人生は規範によって影響されるが、それを出し抜いて生じる人生もあるとして、パターン化と同時に個別化を強調した。この視点は図4の①および④を組み合わせようとしたものと考えられる。

つまりライフコースを分析するためには①～④のどの一つも欠くことはできない。私たちの人生は規範的にも、事実上の機会構造によっても常にパターン化の圧力を受けている。私たちはそのような圧力に対して積極的に同調する局面もあれば、自分の望む人生を生きようとして抵抗を試みる局面もある。重要なのはどの局面で同調し、どの局面で抵抗するのかを分節化することである。

たとえば、事実上のパターン化について見ると、中年期を頂点とする山形のパターンに対して、中年期までは同調するが、それ以降はあくまで山の頂上にいつづけようとして抵抗する。規範的なパターン化については、中年期までは通常の社会的価値に同調するが、中年期以降は再解釈によって最頻的、一般的な価値に抵抗を試みる。

このような当該社会のパターン化の圧力と個人の同調・抵抗のダイナミクスを分析することによってはじめて、未知とリスクにあふれた非定常システムとしてのライフコースに接近できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、現代日本で「中年の危機」が社会的に創出されるメカニズムと、危機の乗り越え戦略を分析した。そしてこれらの分析を通じて、当該社会の事実上及び規範的なパターン化の圧力と個人の同調・抵抗のダイナミクスを考察することによってライフコースに接近するという視点を示した。

ここではそれにつけ加えて二つのことを指摘しておきたい。第一は、「中年期」研究の理論的意義である。つまり「中年期」に注目することは、夫婦と未成熟子に祖父母を加えたような近代型家族を前提とする人間関係理念に再考を促す。

たとえばこの理念によると親子関係は、子供－大人あるいは老人－壮年、つまり優位－劣位、保護－非保護といった縦の関係として考えられる。ところが中年期の親子は縦の関係ではない。さらに今日の親子は縦の関係なしで過ごす期間が相当長くなっている。このような親子関係をとらえるために新しい枠組みが必要とされている。夫婦関係についても同様である。

また近代型家族理念は家族（とりわけ核家族）に人間の絆としては特別の位置を与え、重要な他者として扱ってきた。しかし第2章でふれたイニシエーションの例にもみられるように、近代以前には人々は家族以外の人と家族以上に親密な絆を結んでいたのである。

このように人間は本来多様な人々と絆を結ぶ可能性を持っているにもかかわらず、近代型家族理念はこのことを無視しがちであった。

したがって「家族＝重要な他者」と前提する前に、いかなる社会的条件のもとで誰が重要な他者となるのか、と問題を立て直す必要があるだろう。

第二に、本稿の視点から見ると「中年の危機」は社会的な価値観を転換していく契機を内包しているということを指摘しておきたい。つまり「中年の危機」には社会構造的要因があり、あるコーホートに共通な経験であるため、多くの人々が規範的パターン化に抵抗して社会的価値の再解釈を試みることになる。このことは、河合隼雄も指摘しているように、壮年男性に人間のモデルをおき「より高く、より強く」を価値とする文化に対する価値転換を意味する。「より高く、より強く」一本やりでは人生全てを生ききることができない今日、弱さや喪失も含み込んだ価値をそれぞれがつくりあげていく可能性をこの抵抗の経験は持っている(21)。

引用文献

(1) 河合隼雄「I概説」『岩波講座：精神の科学6：ライフサイクル』所収、岩波書店、一九八三、pp.1－54

(2) C.G.ユング（鎌田輝男訳）「人生の転換期」『現代思想4：臨時増刊：総合特集ユング』所収、青土社、一九七九、p.50

(3) E.H.エリクソン（小此木啓吾訳編）『自我同一性：アイデンティティとライフサイクル』所収、誠信書房、一九八二、p.122

(4) D.レヴィンソン（南博訳）『人生の四季：中年をいかに生きるか』講談社、一九八〇

(5) Elder, G.H. Jr., 'Family History and the Life Courese' "Journal of Family History", 2, 1977, pp. 279－304

(6) 事実上の社会的時間の定義はライリー等の「事実上の年齢基準（factual age criteria）」の定義を参照した。
Riley,M. W., Foner, A. and Waring, J., 'Sociology of Age', Smelser, N. J. edt. "Handbook of Sociology" SAGE PUBLICATIONS, INC., 1988, p. 251 p.266

(7) Levine,R.A. 'Adulthood among the Gusii of Kenya', Smelser, N. J. and Erikson, E. H. edts. "Themes of Work and Love in Adulthood" HARVARD UNIV. PRESS, 1980

(8) Karp, D. H. and Yoels, W. C. "Experiencing the Life Cycle : A Psychology of Aging" CHARLES C THOMAS・PUBLISHER, 1982

(9) Riley, Foner and Waring, op. cit, p.266

(10) 西田耕三『日本的経営と人材』、講談社、一九八七

(11) 中谷巌『転換する日本企業』、講談社、一九八七
NHK取材班・岩間芳樹『ザ・デイ：1：あなたは職場に残れるか』、日本放送出版協会、一九八五

(12) 「『団塊の世代』のポスト不足で悩む：（財）日本人事行政研究所『将来あるべき人事管理を考えるための基礎調査』より」『労務研究：第39巻：第5号』所収、（社）日本労務研究会、一九八六、pp.22－32

(13) 河上一雄「人の一生：1－5」、竹田旦編『日本民俗学講座：第2巻：社会伝承』所収、朝倉書店、一九七六

(14) D.プラース（井上俊、杉野目康子訳）『日本人の生き方』、岩波書店、一九八五、p. 11

(15) 同書、p. 24

(16) 同書、p. 15

(17) 「一代かぎりの家業：オヤジは鶏舎の中で倒れたら本望ちゃうかと思う」、スタジオ・アヌー編『家族？』所収、晶文社、一九八六、pp. 414－420

(18) P.バーガー・T.ルックマン（山口節郎訳）『日常世界の構成：アイデンティティと社会の弁証法』、新曜社、一九七七、pp.264－272

(19) 森岡清美「序章：ライフコース接近の意義」、森岡清美・青井和夫編『現代日本人のライフコース』所収、日本学術振興会、一九八七、pp.7－9

(20) G.H.エルダー（本田時雄ほか訳）『大恐慌時代の子供たち：社会変動と人間発達』、明石書店、一九八六

(21) 河合隼雄、前掲書、p.9